

膀胱がん治療薬の 耐性の仕組み解明

福島医大のチーム

福島医大泌尿器科学講座の眞壁俊太助手、小島祥敬教授、生化学講座の西田満教授らの研究チームは、膀胱がんの治療薬「エルダフィチニブ」を投与する過程で、薬が効かなくなる「薬

剤耐性」が起こる仕組みを解明した。

膀胱がんには国内で年間約2万人が罹患する。研究チームは再発や転移が起きやすい難治性の筋層浸潤性膀胱がんの治療で、エルダフィチニブが有効かを解析した。投与初期にはがん細胞の細胞死が誘導された一方、治療を継続すると細胞の増殖などに関わ

る「MET（メット）遺伝子」の増幅が生じたりし、薬剤耐性が起こることが分かった。

こうした結果を受け、細胞や動物を使った実証実験でMET阻害薬「カブマチニブ」をエルダフィチニブと併用して投与した結果、MET経路の異常活性化を抑え、エルダフィチニブが効かなくなる現象

を抑える効果があると分かった。

研究成果はエルダフィチニブの効果を持続させ、膀胱がんの新たな治療戦略につながる可能性があるとしている。研究に関する論文は英学術誌「セル デス & ディジーズ」に掲載された。

ニュースファイル

県内

■相馬井戸端長屋の研究冊子製作

福島医大医学部放射線健康管理学講座は、東日本大震災の発生後に相馬市が整備した高齢者集合住宅「相馬井戸端長屋



の同居者らに対し、長期間実施した健康状態や生活状況に関する調査・研究成果を冊子にまとめた「写真」。

被災後の高齢者の社会参加や心理的な安心感、孤立予防などを考える上で住居が連なる「長屋」が果たした役割などを掲載した。相馬市をはじめ浜通りの被災自治体の他、南海トラフ地震の防災対策推進地域に指定された市町村などへの配布を予定している。大規模災害時の教訓として防災施策に生かしてもらう。